

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2470 号

Risk factors for recurrence after coil embolization for internal carotid artery-posterior communicating artery aneurysms

内頸動脈後交通動脈分岐部動脈瘤に対するコイル塞栓術後の再発因子に関する後方視的検討

福田 慎也 (ふくた しんや)

博士 (医学)

論文内容の要旨

内頸動脈後交通動脈分岐部動脈瘤 (以下 IC-PC AN) に対するコイル塞栓術の施行例は近年増加しているが、塞栓術後の再発率は高い。本研究の目的は IC-PC AN に対するコイル塞栓術後の再発因子を明らかにすることである。2013 年 4 月から 2019 年 8 月までの期間にコイル塞栓術を施行した IC-PC AN のうち、術後に脳血管撮影検査で再発の有無を評価した連続 69 例を対象とした。非再開通グループ/再開通グループの 2 グループに分類し、年齢、性別、発症様式、動脈瘤のドーム径、ネック長、ドーム対ネック比、動脈瘤体積、後交通動脈 (以下 Pcom) の径、Pcom が瘤のドームより分岐しているか否か、Pcom のタイプ、治療直後の塞栓結果、ステント使用の有無、Pcom の温存を検討項目として比較検討した。

非再開通グループ/再開通グループはそれぞれ 49 例、20 例であった。動脈瘤のドーム径、ネック長、動脈瘤体積、Pcom 径の中央値は、それぞれ 5.19/6.47mm、3.25/4.23mm、47.5/120mm³、1.11/1.96mm で有意差を認めた。発症様式、治療直後の塞栓結果とステント使用の有無については有意差はなかった。多変量解析では Pcom 径のみが有意な因子であった (odds ratio: 3.52 95%CI 1.43-8.69 p=0.006)。Pcom 径のカットオフ値を 1.79mm とすると術後再発の感度 83.7%、特異度 60%であった。

IC-PC AN のコイル塞栓において、動脈瘤のドーム径、ネック長、動脈瘤体積、Pcom 径が術後の再発に関連しており、特に太い Pcom 径は独立した再発因子であることを示した。本結果は IC-PC AN に対するコイル塞栓術の治療適応、術後のフォローに関して重要な意味を持つと考える。